南葵音楽文庫ニュースレター
NANKI MUSIC LIBRARY
Newsletter
南葵文華
2026.10.31
第１５号

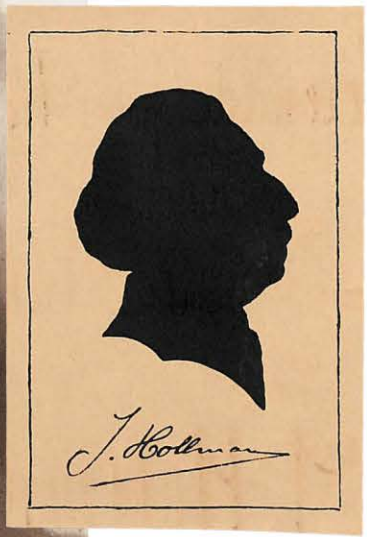
不世出のチェリスト　Joseph Hollman,1852-1926

ホルマン100年
記憶と遺産を今に

徳川頼貞の招聘により1923年春来日。各地で演奏を披露した大家は、滞日中に長い演奏活動を日本で閉じることを決意、愛用の楽器も日本に残しました。所蔵楽譜は頼貞に遺贈され、現在は和歌山にあります。その「ホルマン文庫」からは、彼の記憶や栄誉が濃密に伝わってきます。逝いて100年になる今も。



◀頼貞とホルマン1923年
和歌山県立博物館 所蔵
喜多村進関連資料より



▲J.ホルマンの蔵書票



▼サン＝サーンスの三重奏曲演奏
チェロ：ホルマン、右端に作曲者
Grun社の絵葉書、1910年

ホルマンの演奏

あの洗練に洗練を重ね、彫琢し尽くされた芸術の朗らかさ、ああした境地は老大家でなければ到達し得ない。真直ぐな、無造作な、衒いもわざとらしさもない演奏の枯淡さは、南画の水墨山水の与える感じと同じような空気を醸し出す。あのバッハの「アリア」は、ほとんどバッハがあれを作曲するときの心持ちに近いだろうと思われる崇高な解釈をもって演奏された。

特に意を用いているという様子は更になく、煙が室内を上がるように、水が高きより低きに着くように、指が自然と絃を上下し、弓は左右に徂徠して、調べは自然に幽玄の妙所を響かせ、音の発するところに従って法を超えない至境に参入している。　（徳川頼貞『蔷庭楽話』より）

ヨーゼフ(ジョセフ)・ホルマン Joseph Corneille Hubert Hollman

(1852.10.16 Maastricht – 1926.12.31 Paris)

林淑姫

略歴

オランダの古都マーストリヒトに生まれる。父カレル Karel(シャルル Charles、1813 – 1882)はワイン商を営む一方、地元のフランス語日刊紙『ル・クーリエ・ド・ラ・ムーズ』の発行に携わり、市議会議員などの公職も務めた。ホルマンがチェロに興味を持ったきっかけは7歳のクリスマスに両親から贈られたプレゼントだったという。マーストリヒトの音楽教師アンドレ・ケラー(1805–1870)に学んだのち、1866年、14歳でブリュッセル王立音楽院に入学。チェロをイシドール・デスヴェルト(1830–ca1896)に、音楽理論と作曲をフランソワ=ジョゼフ・フェティス(1784–1871)、シャルル・ボスレ(1812–1873)に学び、1870年に首席で卒業。卒業祝いに父から1740年製のグァルネリのチェロが贈られた(のち「マダム・ホルマン」と命名)。

卒業後は国王ウィレム三世の奨学金を得てパリへ赴き、レオン・ジャカール(1812–1873)に師事。さらにサンクトペテルブルクで「チェロの帝王」と称されたカルル・ダヴィドフ(1838–1889)の薫陶を受けた。ホルマンの演奏を最初に聴いたダヴィドフは「あなたは生徒ではなく、すでに芸術家だ」と讃えたとの逸話も残る。

1875年、ジュール・パドルー主宰の管弦楽団「コンセール・ポピュレール」と共演し、パリで本格的なデビューを飾った。1880年代には、ハンス・フォン・ビューロー(1830–1894)が音楽監督を務めていたマイニンゲン宮廷楽団に一時在籍。1887年以降はパリを拠点にソリストとして活躍、端正な技巧と豊かな音楽性を備えた名手として高い評価を得た。

パリでは、カミーユ・サン=サーンス(1835–1921)、ジュール・マスネ(1842–1912)、ウジェーヌ・イザイ(1858–1931)、フレデリック・ディーリアス(1862–1934)らと親交を結んだ。なかでもサン=サーンスとの結びつきは深く、1885年のロンドン・デビューで共演して以来、しばしばジョイント・リサイタルを開催した。サン=サーンスは《チェロ協奏曲第2番》(1902)、《チェロソナタ第3番》(1919)をホルマンに、《ミューズと詩人》(1909)をホルマンとイザイに献呈している。また、マスネは《チェロと管弦楽のための幻想曲》(1897)、ディーリアスは《チェロとピアノのためのロマンス》(1896)を彼のために書いた。

作曲家としても、チェロの魅力を知り尽くした演奏家ならではの作品を残した。《チェロ協奏曲第2番》(1886)のほか、《4つの小品》(1884)、《カルメン幻想曲》(1885)、《シャンソン・ダムール(愛の歌)》(1888、歌曲版とも)、《セレナーデ》(1890)、《6つの小品》(1892)、《恍惚 Extase》(1893)、《古謡Vielle Chanson》(1894)、《アンダンテ・レリジオーゾ》(1902)、《インテルメッツォ》《紡ぎ車Le Rouet》(1903)、《アンダンテとアレグロ》(1912)など、チェロのための作品を多く出版している。録音にも早くから関心を示し、フランスのパテ、英国グラモフォン(G&T)、ビクターなどに音源を残した。1875年以降、ホルマンは西ヨーロッパ、スカンジナビア、ロシア、北米、南米へと精力的に演奏旅行を重ねた。1923年には日本も訪れている。

「卓越した技巧、柔らかく力強い音色、深い音楽性」で知られた名チェリスト・ホルマンは、1926年12月31日パリで没した。棺は故郷マーストリヒトに運ばれ、翌年1月7日に市を挙げて葬儀が営まれた。生家の建物には「ヨーゼフ・ホルマン生誕地/1852 – 1926/ウィレム3世陛下の宮廷チェリスト」と刻まれた銘板が掲げられ、市庁舎には胸像が置かれている。自作を含むおよそ1000点の楽譜蔵書は、没後まもなく東京の友人徳川頼貞(1892–1954)に送られ、南葵音楽図書館に収められた(現・和歌山県立図書館「南葵音楽文庫」保存、公開)。

ホルマンと日本――1923年3月から7月

1923(大正12)年3月、70歳のホルマンは徳川頼貞の招きに応じ、演奏旅行で滞在中のニューヨークからサンフランシスコを経て来日した。二人はその2年前にパリで知り合い、サン=サーンスも熱心に訪日を勧めたという。

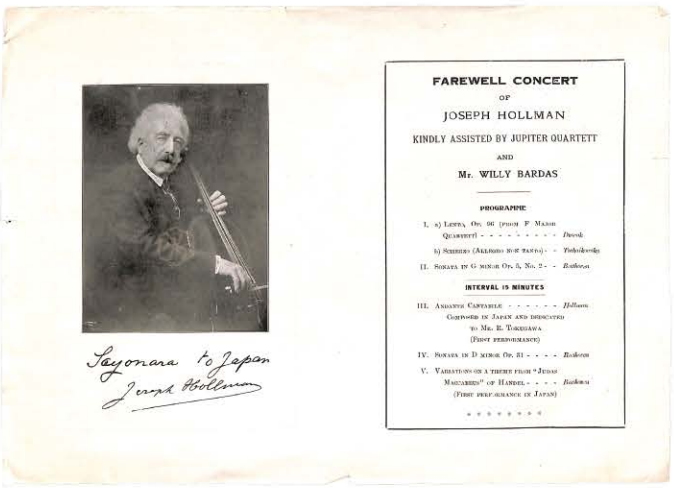


横浜に到着したホルマン(1923.3.20)
左は付き添いのジャンヌ・ルベスク
『音楽グラフ』創刊号(大正12.5)

当初2か月の予定だった滞在は4か月に延び、東京、横浜、大阪、神戸、京都、名古屋で10数回に及ぶ公開演奏会を開催した。その演奏は新聞評に「入神の妙技」と絶讃され、日本の聴衆に深い感銘を与えた。また、久邇宮朝融王(1901–1959)にチェロを教授し、最終レッスン後に愛用の銘器「マダム・ホルマン」を贈呈、楽器はほどなく東京音楽学校に下賜された。6月、日本での功績により勲三等旭日中綬章を受章。その1か月後にホルマンは横浜を発ち、バンクーバー経由で、一旦ニューヨークに戻り、その後まもなくパリに帰着した。パリから大震災を気遣う手紙が徳川頼貞宛に届けられている。

日本公演のプログラムは、ヘンデル、ベートーヴェン、メンデルスゾーンなどの古典から、サン=サーンス《チェロ協奏曲第1番》、アントン・ルビンシテイン《チェロソナタ第1番》、ブルッフ《コル・ニドライ》、ボエルマン《交響的変奏曲》、ヴィドール《カンツォネッタ》、さらに自作の協奏曲や小品にまで及んだ。シューマン《トロイメライ》、サン=サーンス《白鳥》、自作《紡ぎ車》などはと

りわけ聴衆を喜ばせた。大阪公演ではニューヨークで知り合った藤原義江と共演し、告別演奏会では来日中に作曲した《アンダンテ・カンタービレ》を初演した。ホルマンは、大正期の日本に、チェロを通じて、ヨーロッパ近代音楽のエスプリと品格を伝えた。彼がこの地に遺した楽譜群もまたその世界をひそやかに語り伝えている。



ホルマン「告別」コンサートのプログラム
（南葵音楽文庫関連資料より）
1923年5月26日午後7時30分から南葵楽堂で催されたコンサートで、ホルマンは頼貞に献呈した自作《アンダンテ・カンタービレ》を初演した。ホルマンはそのプログラムに、Sayonara to Japan と書き残している。

頼貞が語る
セロの名手ホルマン氏

ホルマン来日が実現する前年、招聘を計画中の頼貞は、音楽雑誌のために知己の音楽家について語った。談話をまとめた形で掲載された記事を部分的に修正し抄録した。（美山）

ジョセフ・ホルマン氏は、ビクターレコードへマスネのセロ曲《エレジー》を入れている。ヴィクトリア女王の寵を受け、芸術家に賜る勲章、その他仏国政府からも勲章を授けられている。今年70歳の老人である。従って過去における彼の生活は興味深いものである。19世紀から20世紀へかけての世界的大音楽家の多くが彼の友人知己であったこともその一つである。リスト、ルビンシュタイン、サラサーテ、オーレル、ダヴィドフら皆、彼の親友であった。

最近の5年ほどは先ごろ逝きしサン＝サーンスと最も親しく交わり、かつてこの両人は仏英の音楽旅行を試み、各地において盛んに歓迎されたことがあった。サン＝サーンスの口を借りて言えば、彼は現代において多くの名曲の精神を知り、その作曲家が作品に込めた精神をそのままに演奏する唯一人のセロの名手である。したがって、今日の若い音楽家が彼ホルマンの演奏を獲得する事は非常に困難なこととされている。

彼は今アメリカにとどまっている。昨年の12月から向こう二ケ年間、ニューヨークのコンサート・リーグと契約ができたのである。今日、アメリカにおいて、ボストン交響楽団とともに、世界2大オーケストラと称せられるフィラデルフィア管弦楽団の伴奏によって、彼ホルマンはセロ演奏を成しつつある。彼が今日、アメリカにおいて、どれほどの歓迎を受けているかは、想像に難くない所以である。

私は彼ホルマンをぜひ我が日本の楽界へも紹介したいと思っている。

ホルマン氏は私に向かって言った。チャイコフスキーの《ロココの主題に拠る変奏曲》などはつまらぬ。あれはプログラム・ミュージックだ。プログラム・ミュージックは純粋の音楽とは考えられない。真の音楽は音楽そのものであらねばならぬ。かく話された後で、彼はサン＝サーンスの最近の曲を聞かせてくれた。そして言った。「これこそ本当の音楽です」

『月刊楽譜』11巻6号（1922年）



ホルマンと頼貞（1923年）
来日時に撮影されたもの



パリ16区の自宅（リューベック通り30番地）で オランダの風景画に囲まれて
近隣には近代オリンピックの父クーベルタン男爵が住んでいた。東洋美術を集めたギメ美術館に近接。この自宅で世を去ると、暖炉のうえの胸像は故郷マーストリヒト（オランダ）の市庁舎に移設され、遺された楽譜は南葵音楽図書館に旅立った。

ホルマンを聴く魅力、弾く愉悦

チェリスト、沖縄芸術大学教授　**林　裕**

今日チェリスト＝作曲家の作品を聴く魅力は、チェロ音楽に聴き慣れていない方には懐かしく、玄人には新鮮にお聴き頂ける所でしょう。チェロは、バッハの無伴奏組曲でストイックな世界を感じさせたり、室内楽で低音を支えたり、ベートーヴェン、ブラームスなどのソナタで他の楽器とメロディを受け渡しながら演奏する地味で控えめな楽器だと思っている方は少なくないと思います。演奏会のアンケートに「なぜバッハじゃない？と思ったのに、紹介して頂きありがとう」や、「チェロってメインはれる楽器なんですね！」と記入されたように、チェリスト＝作曲家の作品は、チェロを主役にしてくれる楽曲なのです。演奏技術が必要な名人芸は、昔の名手が自分の技術を魅せただけでなく、現代のチェリストへの挑戦状という側面があります。そして、挑む事は過去の名手からチェロの技術を教示してくれている様に感じられるのです。また、作曲家の中にはチェロの苦手な事を理解できていないような作品を書く人もいますが、チェリストが書いた楽曲は、チェロという楽器を知り尽くしている事で弾きやすかったり、自分が弾けない場合には、名手を尊敬し、自分の技術を向上させようと誓ったりします。

また、ホルマンの作品の中には、ゆったりとした歌心のある作品が存在します。Extase や Adagietto、Pourquoi?などはチェロが持つ本来の魅力を出せる作品ですし、ホルマン自身がロングトーンに自信を持っていた事を楽譜から感じる事ができます。また、情報過多の時代にも関わらず、参考になる音源がないので、自分で音楽表現のアプローチを行うといった稀有な体験ができるのも魅力的です。



2027年2月に和歌山県立図書館メディア・アート・ホールで開催されるコンサートでは、ホルマンが1923年に来日時に演奏した楽曲からプログラミングされています。クラシック音楽の演奏会での王道ベートーヴェンのピアノトリオ「大公」、対照的に、ホルマンの作品群では曲の宝探し感覚で、既知と未知、伝統と発掘といった南葵音楽文庫ならではの二面性もお楽しみ頂きたいと思っています。

ホルマン演奏の記憶～残された録音～

佐々木勉

ホルマンの後半生には、いわゆるSPレコードとそれを再生する蓄音機が普及し、録音が盛んに行われた時代が訪れている。そんな時代にあって、「名手」として人気を博していたホルマンも、録音に引っ張りだこだった。

ホルマンの最初の演奏録音は、フランスあるいはイギリスで1904年頃に行われたようだが、現段階では情報が不足している。

確実な演奏録音の記録が残るのは、1906年1月中旬から2月初めにかけてアメリカのビクター Victor社が行ったものである。この際には、13点のレコード（演奏時間は技術的な制約からそれぞれ3分弱）が制作された。サン＝サーンスの《白鳥》、シューマンの《トロイメライ》やショパンの《ノクターン》(op.9-2)、自作チェロ協奏曲の第2楽章《アンダンテ・レリジオーソ》などの主にチェロとピアノ伴奏による演奏である。さらにソプラノ歌手のエマ・イームスと共演したグノーの《アヴェ・マリア》やマスネーの《エレジー》、アルト歌手エルネスティーネ・シューマン＝ハインクと共演したシューベルトの《憧れを知る者だけが》やグノーの《アヴェ・マリア》なども収録された。1910年代に入るとアメリカでの録音は減るが、自作の《シャンソン・ダムール（愛の歌）》が録音されている。

1910年代には、フランスやイギリスでも録音が行われた。フランスのパテ Pathé社は、アメリカで録音された作品の他、ダヴィド・ポッパーの《ガヴォット第2番》や自作の《小ワルツ》などを、イギリスでは、グラモフォン Gramophone（旧 Gramophone & Typewriter Ltd. [G&T]）社がビゼーの《アダージェット》などを録音している。

（注：カルフォルニア大学サンタ・バーバラ校のDAHR（アメリカの歴史的録音ディスコグラフィー Discography of American Historical Recordings）には、ホルマンのアメリカ録音について情報が集められている）

▼サン＝サーンス《白鳥》のSPレコードは各社から発売された



日本への別れと感謝　頼貞が伝えるホルマンの言葉

日本各地での演奏を終え、叙勲を受けたホルマンは、愛用の楽器を日本に残し、長い演奏活動を日本で閉じることにしました。離日を前に頼貞は自邸ヴィラ・エリザで小宴を催し、ホルマンへの感謝を伝えました。その模様を、彼は書き残しています。（美山）

席上、在京外交団の主席バッソンピエール ベルギー大使は立って、ホルマン翁の今度の破格の叙勲は翁の光栄は申す迄もないことながら、在留外国人の等しく名誉とするところであると述べて、盃を挙げて我が天皇皇后両陛下の万歳を祝した。この時庭に控えていた戸山学校の軍楽隊は喨喨（りゅうりょう）と「君が代」を奏した。「君が代」が終ると私は立って、ホルマン翁の如き大芸術家を生んだオランダのウィルエルミナ女皇陛下のために乾盃したいと述べて盃を挙げた。一同これに和すと、同時に軍楽隊はオランダの国歌を奏した。

儀礼上のことが終ると、ホルマン翁は目に一杯泪を浮べながら立って次のような挨拶をした。その姿を今も私は忘れることが出来ない。

「皆さん、私のこの度の日本訪問は、私にとって一生涯忘れられない思い出となりました。数年前パリで、ヨーロッパ巡遊中の徳川侯爵御夫妻にお目に掛りました時、侯爵は日本に来ないかとお勧めになりました。東洋の風物に接したいということは私の多年の宿望でありましたので、私は侯爵のお言葉に従って日本に参りました。この日出ずる国で私の見たものは、第一に殷賑を極めた都会、蜂の巣のように密集した建物、轟々たる鉄道でありました。泰西の文物の取り入れは急進活躍する日本を導く燦然たる炬火でありました。

しかし、日本は絶大なる工業国であるということを知ると共に、また古風な純粋な芸術、洗練された趣味、態度を持っているということも私は知ったのであります。私はお伽噺の都のような京都、それから日光、また箱根などを巡りました。箱根では神聖な富士山に敬意を表しました。徳川侯爵は都踊りとか、歌舞伎とか、その他あらゆる日本固有の芸術を私に味わせて下さいました。その上、教えて下さったことは、日本人の親切さであります。この美しい伝統こそ日本文化の総てを第一列に持って来たところのものだと思います。

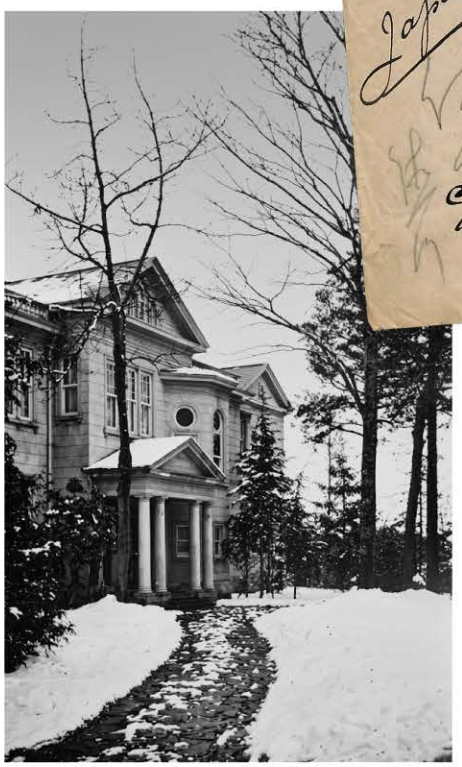
私は日本で私の一生を通じて最も大きな歓迎と賞賛とを受けました。確かに多くの日本の人々は泰西の芸術に動かされております。我々芸術家はその役目が音楽の鑑賞のためという以上に更に意義あるものであると思います。それは芸術という綱によって国際間の友誼を固めるものとなるからであります。私が音楽会で演奏することは、私には故国からの使命を伝えるように感じます。また日本とオランダとの特別な友好関係は、私をしてその使命を果す事を容易にさせたと信じます。私は近く日本を去ることとなりました。特別の思召によって、未だ楽人が受けたことのない高い名誉の勲章を戴き、懐かしい思い出を胸に収めて私は第二の故郷パリに帰ります。皆さん御機嫌よう。（徳川頼貞『薔庭楽話』より）



平野屋で日本料理に興じる
ホルマンとヴァイオリンの名手ブルメスター
平野屋は京料理の老舗で、東京・日比谷に支店があった。この写真は『アサヒグラフ』に掲載されたもの。また、大阪・北浜の鶴屋でも日本料理を嗜んだが、頼貞はそのエピソードを「ホルマンと日本料理」と題して『薔庭楽話』で紹介している。



アメリカ経由でパリに戻った
ホルマンから頼貞に届いた手紙。
消印は1923年12月26日。



ヴィラ・エリザ（『薔庭楽話』より）
東京・目黒駅近くの上大崎にあった。私邸とゲストハウスを兼ね、多くの音楽家、外交官が訪問、逗留し、文化交流の拠点ともなった。建築はJ.ガーディナー。



京都音楽協会のメンバーと
ホルマン。右隣は徳川頼貞。
（1923.4.23）
吉田恒三『京都音楽史』（1942）

南葵音楽文庫をめぐって［J.ホルマン100年］2026～2027

＊主催・発行・会場：特記なき場合は和歌山県立図書館
＊氏名：特記なき場合は南葵音楽文庫研究員
＊南葵音楽文庫サポーター,同普及会は、サポーター,普及会と略記
（編：美山良夫）

LECTURE

重要資料報告会

「ホルマン文庫から～チェロとオーケストラのための作品パート譜(1)ホルマン、マスネ、ゴルターマン」
2026/9/19(土)13:30～15:00
報告者 美山良夫



▲絵葉書
（南葵音楽文庫関係資料より）

南葵音楽文庫アカデミー

不世出のチェリスト没後100年
J.ホルマン：レガシーと音楽遺産
2027年2月21日(日)13:30-15:30
美山良夫(慶應義塾大学名誉教授)
佐々木勉(元名古屋音楽大学教授)
近藤秀樹(大阪教育大学・和歌山大学講師)
林淑姫(旧日本近代音楽館主任司書)
親しくした徳川頼貞の招きで来日、各地で名技を披露したJ.ホルマン(1888-1927)が遺した楽譜はすべて南葵音楽文庫に収蔵されています。高名音楽家との交流、創造、一世を風靡した演奏の息吹をとどめた「ホルマン文庫」の魅力と価値を検証し、レガシーの数々を紹介します。

PUBLISHING

『南葵音楽文庫紀要』第10号(2027年3月発行)
J.ホルマンについての調査報告等を掲載予定。

CONCERT

南葵音楽文庫10周年記念事業演奏会

会場 メディア・アート・ホール［入場無料］

2月と3月にそれぞれコンサートが開催されます。

2027年2月20日(土)14:00開演
演奏 澤亜樹(Vn)、林裕(Vc)、宮下直子(Pf)
解説 近藤秀樹（南葵音楽文庫研究員）
曲目 ベートーヴェン：ピアノ三重奏曲《大公》ほか

2027年3月21日(日)15:00開演
演奏 太田真紀(Sop)、宮下直子(Pf)、反保沙季(Pf)
曲目 ベートーヴェン交響曲第9番第4楽章（リスト編曲の2台ピアノ版） ほか

音のある南葵案内

毎月第3日曜13:30～14:30［無料・予約不要］
南葵音楽文庫閲覧室

貴重な、珍しい、懐かしい楽譜や書物数点を、関連する音や映像をまじえ、研究員が易しく紹介します。

6月21日	**日本と欧米のいろいろな音楽雑誌**	(美山)
7月19日	**忘れられた楽譜たち**	(近藤)
	パリの小出版社スナールの楽譜あれこれ	
	その① 時代の最先端＋温故知新	
8月16日	**忘れられた楽譜たち**	(近藤)
	パリの小出版社スナールの楽譜あれこれ	
	その② 音楽の"エコール・ド・パリ"	
9月20日	**G.F.ヘンデルの名曲が聴こえる**	(佐々木)
	南葵音楽文庫の貴重資料さまざま	
10月18日	**オペレッタの愉しみ**	(林)
11月15日	**「セロの大家ホルマン」の演奏でたどる**	
	ホルマン文庫資料あれこれ	(佐々木)
	【J.ホルマン没後100年】きのくに文化月間参加事業	
12月20日	**NHK［歴史探偵］の資料オリジナルを**	
	じっくり見る集い	(美山)
1月17日	**音楽のジャポニズム!? あれこれ**	(未定)
3月21日	**音でたどる：南葵音楽図書館による**	
	ベートーヴェン百年忌(1927年3月)	(林)
	【ベートーヴェン200年展示】連携	

※2月21日は「南葵音楽文庫アカデミー」開催のため、「音のある南葵案内」はお休みします。

IN HIS HOME COUNTRY...

ボンジュール、ジョセフ！展

故国オランダでは、故郷の町マーストリヒトのOpus9（旧聖テレジア教会）において、ホルマンを再評価・顕彰する行事が開催（8月23日～9月20日）。南ネーデルラント・フィルハーモニー主催、若手演奏家によるチェロのリサイタル演奏もプログラムとして組み込まれ、彼の楽曲が現代に蘇った。

2024年にはオランダ語の評伝も出版されている。





ISBN:978-9024466498

南葵文華第15号
令和8年10月31日発行

発行所
和歌山県立図書館
〒641-0051 和歌山市西高松1-7-38

編集
合同会社芸術資源研究所
〒600-8439 京都市下京区坂東屋町261-2-1001

編集協力
有限会社ティアンドティ・デザインラボ
〒649-2326 和歌山県西牟婁郡白浜町椿36